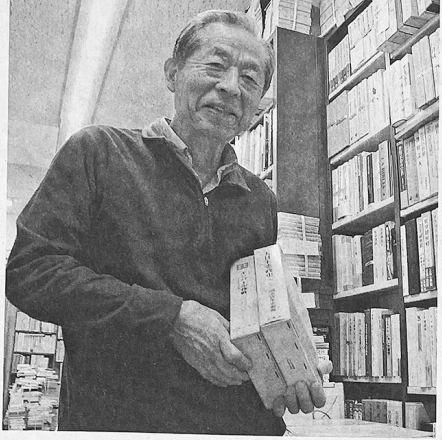
古書店100年 歴史閉じる

厳選品ぞろえ 愛され

浦和・来月末で

さいたま市浦和区常盤で100年近く営業を続けてきた古書店「金木書店」が閉店する。地元の読書好きに長年愛されてきたが、店主の金木好夫さん(72)が2年ほど前に体調を崩し、「本を整理する元気があるうちに」と、3月末で店をたたむことを決めた。店には閉店を知ったファンが多く訪れる。金木さんは「あと1か月半。昔ながらの古本屋で昭和の時代を感じてもらえたら」と話す。（児玉森生）



店主の金木さん。「昔ながらの古本屋」と言うが、品ぞろえにはこだわってきた（1月31日、さいたま市浦和区で）

旧中山道に面した店の間口は5㍍ほど。小さな店舗だが、大人の背丈よりも高い書棚やその上には、純文学から児童書、民俗学の専門書や美術展の目録まで、幅広い分野の本がきちんと整理されて収まっている。外箱に入った重厚なものも多い。金木さんが「読み終えた時、少しでも学びになっているものを」と厳選した、自慢の品ぞろえだ。

創業者は東京・神保町に店を構えた祖父芳蔵さん。その店を閉めた後、家族が関東大震災直後の1924年（大正13年）頃に現在の場所で再開した。北浦和公園の場所にあった旧制浦和高校（現埼玉大）の学生が立ち寄ったほか、洋画家の斎藤三郎や写真集「瞽女」で知られる写真家の橋本照嵩さんら、浦和の芸術家も通ったという。

金木さんも40年以上、店に立ち続け、市内外の古本市にも月に2、3度は出店してきた。来店客には、昭和初期の浦和周辺の地図を探す郷土史家や、人気ミステリーの主人公・金田一耕助風の姿で横溝正史の作品を買い求める若者もいた。

「癖が強い本好きにはたくさん出会った」と金木さん。自宅の階段の壁面まで本棚に使っていた読書家。すべての本に蔵書印として自分で押印していた人や、読了日を書き込んでいた人……。買い取りの際の思い出も数え切れない。

昭和62年（1987年）当時の金木書店＝同書店提供

■ファン「文化支えた」

近年はインターネット上の書店やオークションの利用者が増え、金木書店のあるJR浦和駅周辺でも、かつて10軒ほどあった古書店が次々に姿を消した。金木さんも、自身の代で店を終わらせることには寂しさがある。せめてもの願いは、人々の記憶に「品ぞろえにこだわる古本屋があったね」と刻まれることだ。

店舗はなくなり、その後は古本市やインターネットでの販売になるが、金木さんの願いはかないそうだ。1月中旬、SNSで閉店を知らせると、ファンからは惜しむ声が相次いだ。仕事帰りに立ち寄るのが好きだったという会社役員の男性(50)は、「購入すると、次の機会には関連する本が並んでいた」と、顧客に配慮した仕入れを覚えている。閉店は残念だが、店に伝えたい言葉は別にある。「100年間、地域の古本文化を支えてくれた。本当に感謝しています」